

二十八年めの卒業式

手島 悠介 作

岩淵 慶造 画



岩崎少年文庫 10

二十八年めの卒業式

手島悠介作

NDC 913 東京 岩崎書店 1975 157 p. 22cm

岩崎少年文庫 10

二十八年めの卒業式

一九七四年二月二十八日 第一刷発行
一九七五年三月三十一日 第四刷発行

作者 手島 悠介

画家 岩淵 慶造

発行者 森山 甲雄

印刷所 KMS / 清水印刷紙工

製本所 小高製本工業

発行所 株式会社 岩崎書店

東京都文京区水道一丁目九番二号

〒112 電話(812) 9131

振替 東京 九六八二二

©手島悠介 一九七四

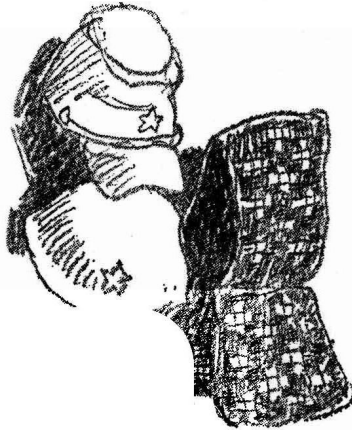
(分)8393 (製)501074 (出)0360

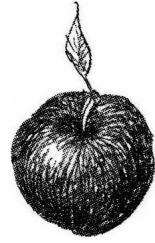
手島悠介 作

岩淵慶造 画

二十八^{そつぎふようしき}年めの卒業式

岩崎少年文庫 10





この本を読むまえに

これから、あなたがお読みになるこの物語は、ただの仮空の、つくられた物語ではありません。じっさいにあった、浅草区（今の東京都台東区）の新堀国民学校という小学校の、戦争中のできごとをモデルにして、創作の手をくわえたものです。

戦後、二十八年もたつて、その小学校の卒業生たちが、もう四十歳にもなるというのに、戦争のためにできなかった小学校の卒業式を、こんどはじめて開いたというのもほんとうの話です。けれども、この本のなかでは、新堀国民学校は、三筋国民学校という名前にかえてあります。

主人公は、朋子という、あなたとほぼ同じ年ごろの女の子です。朋子は、おかあさんが書きつつつていく、おかあさんの子どもたちのころの記録を、熱心に読みはじめます。そして朋子は、おかあさんが小学校六年生のころ、どんな生活をしていたかを知ります。

朋子のおかあさんは、ちょうど、あなたがたのおとうさん、おかあさんぐらいの年令です。ですから、みなさんはきつと、この本のなかで、あなたのおとうさん、おかあさんの少年少女時代の姿を、はつきりと見出すにちがいありません。それは、戦争中という、暗く、不自由な時代でした。平和で、

豊かな時代に育ったあなたがたには、ちょっと想像のつかないようなことがらもたくさんあるでしょう。着る物も、食べる物もない、くるしい時代を、あなたがたのおとうさん、おかあさんは、力強く生き抜いてこられたのです。

この本のなかに書かれていることのなかで、とくに大きなテーマは、学童集団疎開と東京大空襲です。

どちらも、あなたには聞きなれないことばでしょうが、学童集団疎開というのは、戦争がひどくなり、都市に住む子どもたちの命さえ危険になったので、学校ごとに、先生と子どもたちだけで、地方に行くことになりました。まだ小さな子どもたちが、親もとからはなれた遠いなかで、子ども心になんかにみじめな思いをしたか、そのことは、もしあなたのおとうさん、おかあさんに学童疎開の経験がおりなら、よく知っていられることです。私は、学童疎開のじっさいをいろいろと調べ、なるべくありのままに、この本に書きました。

東京大空襲についても、いろいろの記録を読み、空襲を体験されたかたがたの話聞いて、ありのままの姿を再現しようと思えました。現代の戦争が、どんなにざんこくな、悲惨なものかというところが、みなさんにもわかっていただけるでしょう。

私は、この本を、戦災のために亡くなられた、すべての子どもたちの御霊のまえに、心をこめて、ささげたいと思います。

二十八年めの卒業式

もくじ

この本を読むまえに……………二

一 ママにきたはがき……………八

二 卒業記念の木……………二三

三 別れの指切り

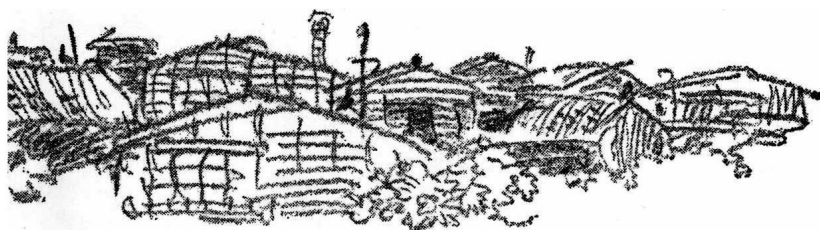
——ママの記録(その一)……………三三

四 絹子さんからの手紙

——ママの記録(その二)……………四四

五 送られてきた薬

——ママの記録(その三)……………六〇



六 みにくい争い あらそ

——ママの記録（その四）……………八〇

七 由紀ちゃんの誕生日 ゆき たんじようび

……………九三

八 東京大空襲 だいくうしゅう

——ママの記録（その五）……………九八

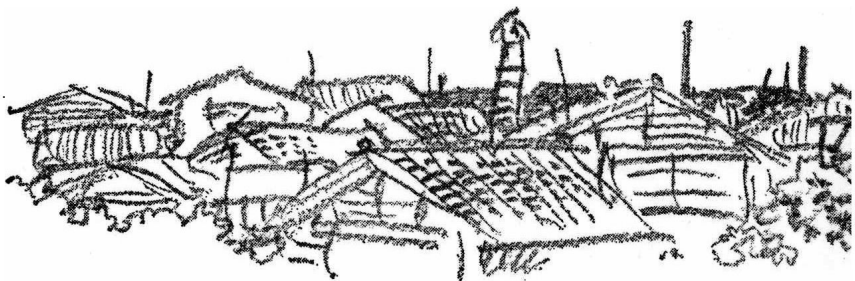
九 炎の海のなかで ほのお

——ママの記録（その六）……………一二三

十 ママといっしょの卒業式……………一三七

あとがき……………一五四

装幀・口絵・挿絵Ⅱ岩淵慶造



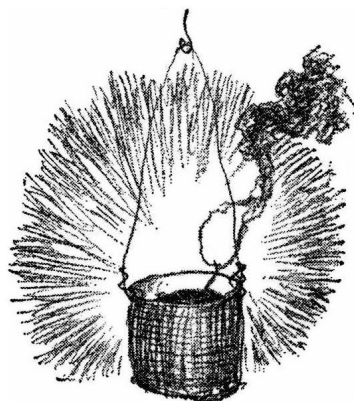


作者紹介

手島悠介（てしま ゆうすけ）

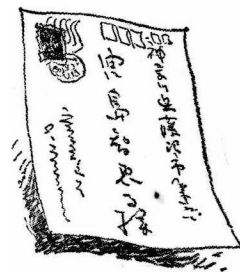
一九三五年台湾高雄市で生まれる。学習院大学文学部哲学科中退。日本児童文学者協会々員。主な著書『手紙になったリンゴ』（岩崎書店）

二十八年めの卒業式





一、ママにきたはがき



学校のお昼休みに、ドッジボールをして遊びはじめたら、雨が降りはじめました。朝からくもっていましたが、まさか降るとは思っていなかったのに。

「雪ならいいのにな」

と、だれか男の子がいました。

「雪合戦ができるのになあ！」

ほんとに、今にもこおって雪になってしまいそうな、つめたい雨でした。雨つぶが、ドッジボールで熱くなったわたしのほおにあたって、ひんやりといい気持ち。

「^{ともこ}朋子ちゃん、もう教室にはいりましょうよ」

そう由紀ちゃんにいわれて、ぬいでいたカーディガンをはおると、わたしたちは教室に走ってもど

りました。

五時間めは、わたしのあんまりすぎでない社会科の試験^{しけん}。

だいたいはできたつもりですが、はっきりしない答えを考えながら、ときどきそうつと、窓^{まど}の外をながめると、銀色にひかった雨の糸が、数かぎりもなく空からあふれてくるようです。

やっと試験を終わって、窓をあけてみると、空はまっくら、雨^{あま}つぶも大きくなって、まるであられのような雨が、校庭の砂^{すな}をたたいています。

わたしは、こんどは寒さにふるえながら、なぜ、ママのいうとおり、カサを持ってこなかったのかなあと、情^{なさけ}ないような気がしました。

下校^{げこう}時の、こみあったげた箱^{ばこ}のところで、

「わたしのカサにはいつて行かない?」

と、由紀^{ゆき}ちゃんにいわれたときは、ほんとにホツとしました。(いつも親切な由紀ちゃん!) 学校で貸^かしてくれるカサは、みんな下級生が持つて行つてしまつて、もうそのときは、一本も残^{のこ}つていなかったのです。

「ありがとう。入れてつてね」

由紀ちゃんのカサのなかにはいろいろとしたら、そのとき、学校の正門から、青いカサをさしてやつてくるママが見えました。

「あ、ママよ！」

ママは、わたしのカサと雨ぐつを持って、やはりお迎えのほかのおかあさんと話をしながら、こちらへまっすぐやってきます。

「よかったわね、朋子ちゃん」

由紀ちゃんのピンク色のカサの上で、大きな雨つぶが、はじけるような音をたてていました。ママも、わたしに気づいたようです。

わたしは手を上げて、ママを待ちました。校庭を歩いてくるママは、ほんのちよっと、びっこを引いています。気をつけないと、ほとんどわからないぐらいですが、ママが小さな子どものころ、小児麻痺という病氣にかかったのが原因なのです。

でも、ママは、足の悪いことなど少しも気にしていません。ママは、子どものわたしから見ても、とても明るい性格です。

玄関まできたママは、

「朋子がいうことを聞かないからよ」

と、しかるようにいいながら、わたしの黄色い雨ぐつを床に置きました。いそいでそれをはきながら、わたしは、

「どうも、ありがとう」

と、聞こえないぐらいの小さな声で札をいいました。

だって、ほかのお友だちに、きまりが悪かったからです。でもママは、べつに怒っているようすはありませんでした。

「今日はね、これから、PTAの卒業対策委員会があるの。まだ少し時間があるけど、ついだったから、持ってきてあげたのよ」

ママは、家のカギを取り出しました。

「じゃ、お留守番をたのんだわよ」

「うん」

わたしはしっかりと、そのカギをポケットに入れました。

ママは毎年、PTAのお仕事をよくしています。足が悪いのも平気で、とことこ動きまわっています。でも、ママのいちばんいいところは、決して教育ママではないところです。だからわたしは、ママがだあいすき。

いま卒業対策委員会では、こんど卒業するわたしたち六年生が、学校に贈る記念品について、いろいろ話しあって決めているようです。ですからママは近ごろ、よく学校に顔を出していました。

「じゃ、帰るわね」

わたしはそういうと、運動ぐつをビニールにくるんで、由紀ちゃんといっしょに玄関を出ました。

風まじりの、ざあざあ降りをつめたい校庭を、走って行く男の子たちがいます。カメのように、トックリのセーターのなかに首をつつこんで、背中をまるめ、頭を押さえながら、どんどんかけて行きます。もう少しのところ、わたしもあんなかつこうになるところだったな、とわたしはちよつぱり、反省しました。

家について、門をはいろうとすると、雨にぬれた郵便受けに、一枚のはがきがはいっていました。取り出してみると、ママあてのはがきで、ママの名前がすっかり雨ににじんでいました。裏を返してみると、印刷された小さな文字がびっしりとならんでいます。

「謹啓 早春の候 皆様には益々御清勝の御事と拝察申し上げます……」

というような、読めない漢字がたくさんまじった、おとなの文章でした。わたしは、

（こんなに寒くても、三月になれば、もう早春なんだな。そういえば、おひなさまも終わったし、ジンチョウゲの花も咲きそうだし……）

と思いながら、カギをあけて家にはいり、そのはがきをママの仕事机の上に置きました。そしてすぐに、石油ストーブに火をつけました。

やがて炎を上げて、まっかに燃えはじめたストーブに手をかざすと、かじかんだ十本の指が暖くとけ出すみたいで、しばらくわたしは、うっとりとしストーブのまえに足を投げ出していました。



雨は、まだ降りつづいています。室内が薄暗いのに気がついて、ダイニングキッチンの電燈をつけました。

雨がこんなだというのに、兄の悟史は、きつとママよりも、帰りがおそいにちがいありません。中学三年生の兄は、県立高校の試験に受かって安心したせいか、毎日毎日、サッカーにむちゅうで、五時か六時にならないと帰ってこないのです。

でも、兄のことばかりはいえないみたい。わたしだって、あと二十日ほどで卒業して、いま兄の行っている中学へ進むことになるのですが、いま学期末の（いや、小学校時代、最後の）試験中だというのに、何だかあわただしいような、そのくせ何にもすることがないみたいな、へんな、ちゅうぶらりんの気持ちなんですもの。きつと通信簿だって、二学期より落ちるに決まっています。

ふと、ぬれたはがきのことを思い出して、それを、ストーブで乾かすことを思いました。はがきを火にかざすと、白くあわい湯気が、かすかに立ちのぼりました。

このダイニングキッチンのすみに置いてあるママの仕事机には、タイプの機械がのっています。ママは、いくつかの会社に頼まれてタイプを打つ仕事をしているのです。

PTAから生徒にくばるお知らせのタイプを、打ってあげることもあります。そんなことから、ママはPTAの役員に選ばれるのかも知れません。ママは頼まれたら、いやとはいえない人なのです。

その日の夕食のとき――、（夕食には、東京におつとめに出ているパパは、いつも間にあいません。だから、土曜、日曜以外は、ママと兄の三人だけのお食事になります）ママにきたはがきのことが話題になりました。

わたしが読めなかったその印刷されたはがきは、ちょっと変わったはがきでした。というのは、ママの小学校のときの卒業式を、今ごろになって開こうという案内状だったのです。

「あら、ママは、小学校の卒業式をしてなかったの？」

わたしはおどろいて、ママにたずねました。

「ええ。今ごろになって、小学校の卒業式をあげるなんて、あなたたちがびっくりするのもあたりまえね。でも、ママたち六年生は、戦争のために卒業式どころではなかったのよ。だから、こんどはじめて、卒業証書をもらうことになったの」

「ふうん……」

と、大きな一口カツをほおばりながら、兄の悟史がげんそうな声を出しました。

「高校は卒業していても、小学校を卒業していないとは、へんな話だなあ。それでママは、その卒業式に行くつもり？」

ママは、はしを置くと、食卓のすみにあったはがきを手に取って、

「三月二十五日、日曜日か……。ちょうど、朋子の卒業式のつぎの日になるわけね」